

# 蝟螂の斧

(とうろうのおの)

## 社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第九回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

春休みの旅に大分県日田を訪れた。ここに行ったのは偶然以外のなにものでもなく、事前の知識は地名を聞いたことがあった程度だった。そこそこの歳になると、意外なことに遭遇する機会は減る。世の中には未知のことがいっぱいのはずだが、日常はたいてい既知の山になってしまう。そこで、昔のTV番組「遠くへ行きたい」の主題歌のごとく、知らない街を歩いてみたい、どこか遠くへ行きたい と思ったわけである。

やってみると、これがなかなか面倒なことはすぐ分かった。「とりあえず、新大阪駅から西へ向かおう！」と思っていたが、新幹線出口であてもなく切符は買えない。春休みの混雑の中、座席を確保しようとしたら、行き先も希望時刻も定めていなければならなかった。

旅の目的を「知らない街を歩く」に決めたので、行き先は消去法で決定した。これまで下車する機会がなかった九州新幹線駅の一つ、久留米駅にした。この結果、その先の移動が、初めて乗車するJR久大本線になった。この沿線に日田や湯布院があることを知らなかった。断片的知識はあっても、それがどこなのか分かっていないものだなあと思った。

日程すら決めていなかったのだが、五日間、ひたすら知らない場所、初めての経験を優先に選択を繰り返した。結果的に日田二泊の後は、大分経由で佐賀関から九四フェリーにのって、四国・佐田岬の突端、三崎港の民宿に行った。そこから細長い半島を延々と八幡浜に出て、最後が何度か訪れたことのある松山市に行き着くことになった。知らない街があったら、もっと延長しても良かったのだが、選択と決定の繰り返しも疲れた。

二泊することに決めた日田の散策で、咸宜園(カンギエン)と遭遇した。咸宜は「ことごとく、よろしい」という意味だそうで、江戸時代に彼の地に開かれた私塾である。地元の豪商の息子、廣瀬淡窓(ひろせたんそう)が開塾者である。淡窓は江戸末期の儒学者であり教育者である。こう書いたところで、私がいかにそのことを知っているわけでもない。にもかかわらず、思いがけず興味を持ち、今その人物誌などを読んでいます。

研修、教育、人材育成は私の長年の関心事である。天領日田は江戸期には九州の要の地だったとはいえ、ここに結果的に九十年間、この時代の塾としては、一番長く世代をつないで存在し続けた民間の塾に大いに好奇心をくすぐられた。案内のおじさんの話を聞き、資料館をいくつかのぞき、参考文書を手にした。この場所に、全国から学びの徒が訪れ、寮生活をしながら日夜学んだ。そこからたくさんの人材が輩出したことを知って、気持ちの高鳴りを覚えた。若くして病死する者も少なくない時代に、学びに邁進した若者達を支え、自身は病弱のこともあって、ほとんど九州を出ることのなかった廣瀬淡窓という人の使命感を思った。

こういう人物に会えた旅は、なかなかいい経験だった。出発前に想像もしなかった人や物に会い、そこから影響を貰う。これからも、生きていけば、面白いことがあるだろうと思わせてくれた旅になった。

(2012/5/25)

## 1990年9月

9/5 WED 京都府総合教育センター・教育相談中級講座に話しに行った。3年目になるが、こういう講座の持ち方で、なにが達成できるかなあと思う。能力開発には非常に関心があるから、単なる頼まれ講師になりきれない

同じ京都府組織に属するというので、一度引き受けると、何度も依頼された。講師料も要らないし、業務時間内でも頼みやすいというので、依頼は繰り返された。受講生は府内各校に勤務する教師。時間帯は受講者も執務時間枠内だから多数集まる。

私が話すのだから、それなりに面白く聞いてくれてもいる。しかし、いかほどの効果、成果があったのだろう。「受講生が寝てしまうような講義ではなく…」とか期待されていたのかもしれないが、寝ないで楽しんで貰えるって、互助会の演芸会か？

教員のメンタルヘルスの取り組みだと位置づければ、それなりの意味は見いだせたかとも思うが、結局学校の抱えた課題への支えにはなれなかつたろう。

この経験があって、地域で教員のための家族理解勉強会を有志と継続開催するようになった。三カ所（草津市、茨木市、門真市）で開始し始めて十数年。今も続いているのは草津市だが、皆、熱心な人たちだ。

大雑把な教師批判は、世の中批判の放言と同じで意味はない。若手教員育成に力のない管理職がまだまだ居座っているのが惜しい。たくさんの学校長に会ってきたが、他業種の支店長や中小企業社長と比較して、管理者としての力不足な人が多いのはなぜ

かなあ。個々人の問題ではない課題があるに違いない。

9/7-8 FRI-SAT 施設中堅職員研修の二回目。川崎君をファシリテーターに「ベーシック・エンカウンター・グループ」を実施。変則的だが、僕は観察スタッフになった。

第一セッション90分間、完全に11人が沈黙を買ったのに驚く。後で、「こんな沈黙、生まれて初めての経験だ」と何人かの口から出ていた。

グループとして、つもりをしていたようなことが起こったとはいえないが、何か違った経験をした感じはあった。

一時期、エンカウンターグループが面白くて、度々出かけた。きっかけは、PCA（パーソン センタード アプローチ）1977合宿。日本精神技術研修所が主催して伊香保温泉で三泊四日実施したものに、遠路はるばる私が参加したことに始まる。（この時が、後々、いろんな繋がりを持つことになった佐治守夫さん、平木典子さん、内田純平さんらと初対面である）

それにしても90分の沈黙とは、相当な警戒心だ。

9/9 SUN 一時保護所に中三の女子が来ている。精神病の母と、暴力的な兄から逃れて、施設に行かせてくれといっている。しばらくここに居ることになる。そんなわけで、夜は宿直勤務。男の人と話せないという子だった。

こんな事情の女の子でも、夜勤体勢は男性職員一名だ。22年前の京都府京都児童相談所の一時保護所の静けさは感じてもらえるだろう。

今、日本中、どこを探しても、こんな空

気の一時保護所はないだろう。ほんの20年ほどですっかり変わってしまった。あと10年経ったら、その時には何を騒いでいるのだろう。それとも児童相談所は、すっかり寂れてしまっているのだろうか？

今だけを、声高に騒ぐものではない。長い歴史を振り返れ、ほんの数年前も振り返れ、そして未来を見ろ！である。

9/11 TUE 他の行事の関係で、午前中・受理判定処遇会議。午後、京都市から依頼されて、民生児童委員研修会で話す。会場がいつも労演で芝居を観る京都会館第二ホール。キャパのでかいのと、照明の熱いのと、音響にプロがいることを感じる。

舞台の袖で出番を待っている気持ちは、昔、学芸会の時に感じた気持ちと似ていた。あの時の方がドキドキしたけど。

職場に戻って個別面接。相互なぐりがき法がとても面白い。

いろんな会場で講演をしてきた。基本的にそこには何の思い出もない。あのステージで一度はやりたいと、歌手がカーネギーホールを思うような舞台は、講演にはない。

この研修会は当時京都市職員だった日高正宏さんに「ゲシュタルトセラピー」のワークショップを、施設中堅職員研修講師として依頼したことに関わっている。京都市当局から私の講演とのパーティーでなら市職員を貸し出すと言われたのだ。変なことを言うなぁと思った。

講演に関して振り返ってみると、最高でキャパシティ2000人くらいのホールで話したことがあるが、動員された人たちがざわついてきた記憶だけだ。むしろ少人数だった会場が記憶に残っている。

阪神・淡路大震災直後の豊中・庄内公民館での子育て講座シリーズ。シリーズ最終回として依頼されていたのが、震災直後の土曜日だった。予定通りやってしまいます言われて出向いた。参加者2名。担当職員4名。そして私という結果だった。

9/13 THU 夏バテが来ている。特に気のすまないことをしようとすると、てきめんに体に出る。

心理判定員会議の助言者を頼まれていて出かけていった。畳に座っているのがしんどかった。夜は児相研セミナーの事務局会議で集まってもらったのだが、引き続き不調だった。帰宅して、何も食べずに寝た。夜中にやっと腹がへってきた。

体力だけではなかった記憶がある。自分のしてきた経過を、改変する目論見が進行していた。

なにごととも時と共に変化してゆくことを



否定はできない。しかし、・・・とってしまう我がある。変えるなら進歩を！と押しつけてしまう。変化が必ずしも前進とは限らない。そして前進だけが良いとも言えない。

分かっているが、そう思いきれない。だから後輩のすることに批判的な目がのぞいてしまう。そして、結果がたいしたことにならないと、それに落ち込む。

何もかも自分が仕切ろうなんて思うな。ずっと続けられるわけじゃなかろう・・・そう思っているのだが、やはり。

時代を振り返ると、おこなった事だけでなく、おこなえなかった事の記憶もなくなっている。

9/14 FRI みんなバタバタ出張していたりするので、バックスタッフなしで家族面接をした。4回目のこの母子家族は、当初の予想を裏切ってキチンと来続けている。あまりにも違う兄弟。出来のよくない弟に肩入れする母親。それを兄は黙って認めている。そこで今日は兄を主役の面接にした。

夜は久しぶりの編集者講座。筑摩書房の松田哲夫さん。氏の小学校時代、図画の先生が画家の安野光雅さんだったという経験を持つ同世代人。

先週欠席していたので、村松友視さん講義のテープを借りた。歩きながら聞いたが、とても面白かった。

家裁の審判で児相送致になったケースだった。裁判所の威光を使って、継続的に面接に来なければならないと思いこませた。

ルーズなところのある母親だから、ぬるいことを伝えたらグズグズになるのは見えていた。

継続的に出会う内に、とても特徴的な選択行動パターンを発見。このことは「不登校の解法」(愚弟賢兄)文春新書に詳しく書いた。

そして私は、自分には置き換えられない行動選択をする人の存在を知った。それは誤りではなく、私との違いだった。だから、私が正しいと思う未来像を、押しつけることは出来ないことだけが分かった。

母親は事件を繰り返す弟に肩入れし、つ

るんでいた。理解しやすい好青年の長男はこの一家では孤独だった。家族ってこういう事があるのだ・・・と驚きを持って見ていた。

夜の編集者講座。今考えても、よくこの時、思い切って参加し続けたなあと思う。多くはない受講者のほとんどが、関連企業の人だった。会社から業務として受けるよう言われて、来ているようだった。京都なんてローカル都市ではフリーランスのライターやエディターで食べていくのは大変だから、受講料の高額な講座に参加など出来なかったのだろう。私はそんな中の門外漢の感じで教室にいた。

9/15 SAT 久しぶりに家にいた。一日かかって「こども旅」の原稿を描いた。雨も降っていたし、敬老の日ということもあって、大津の古い鰻料理屋「かねよ」の出前を頼んで、母と一緒に飯を食べた。元気な親父は友人の一周忌に行ってその後、麻雀。長男はクラスの友達のところへ、次男も友達と雨降りだから体育館で遊ぶと言って出かけていて帰宅は遅い。

22年前、こんな風に過ごしていたのか・・・と思い出すと懐かしいような、不思議なような、こんな時代があったのだ。

あの時、今の自分を想像することなど出来なかった。20年余りで、こんなに変化してしまうのか。そりゃ、42歳の人生と65歳の人生では、決定的に違う。誰にも起きることなのに、歳を取るって不思議なことだ。

9/16 SUN 昼過ぎまで寝ていて、その後職場に出かけた。先週から一時保護所に来ている子があるので、宿直のローテーションを組んでいるが、平日の夜にい

ろいろ仕事を入れるもので、日曜日しか泊まれなくなる。先週に続いて日曜日の夕方出勤。

この頃から既に、自分の家族のことは、妻に任せっきりだったことにも気づく。三人の子育てと、私の両親との途中同居。本当に良くやってくれていたんだなあと、今になって思う。

そして、これが相当無理をしていたのもあることが判明し、再度別居暮らしの選択に至るのは、まだ少し先のことである。そして父が亡くなったのを機に、再び同居暮らししたのだ。

9/19 職場周辺にも不穏な空気が渦巻いている。ただならぬ緊張がそこかしこにちらついている。半端じゃない台風が接近している。面接もキャンセルして、早々に引き上げた。風が夕方から本格的になってきた。ゴーゴーいう音に、夜中息子達と玄関を出てみたら、思わず大歓声をあげるほどの嵐だった。「半端やないなあー」とキャーキャー騒いでいたら、ばあちゃんに「ケガでもしたらどおすんの！」と親子で叱られてしまった。

あれから22年、祖父母は他界し、長男、次男は結婚、それぞれに一人ずつ子どもも生まれ、共に関東で暮らしている。末娘も東京に出て行って十二年。今では私たち夫婦二人で、かつて七人が住んでいた家に暮らしている。

これが家族というものだ。そしていつか、我々も世代交代してゆく。個人的には不思議な気がするが、客観的には、実に当たり前のことだ。

ほんの二十年前、私は今の暮らしを想像することが出来なかった。だから、今では

使い勝手の悪い、だだっ広い家を建てた。当然、先の十年後も想像することが出来ない。人はそういうものなのだろう。

9/21 昼休み、組合の学習会があった。支給された弁当を食いながら、給与の話を聞いた。こういう受け身の楽しさは、自主独立の人にはないだろうなあ。夕方家族面接を一つしてから、編集者講座。マガジンハウスKKの甘糟章氏。

夜中にまんが新聞の時事物原稿をFAX送信。どう考えても不思議で便利な機械だ。

FAXが便利なものだなあと感じる対象だった時代。オフィスにはあっても、家庭にある人は少なかった。マンガの原稿送信も可能な精度の高いFAXはありがたかった。ごくわずかな間である。

この後、PCが急速に普及してゆくことになり、出来ることの変化が、人々の発想そのものを変えていった。こんな渦中を、一つ一つ記憶して歳を重ねてこられたのは、幸運な団塊ジェネレーションである。

9/23 第九回心理臨床学会が始まった。川畑君が割に地味なテーマで発表をするので、参加者が少ないと辛いなあと言っていたこともあって出席した。ところがなんと、これまでの我々仲間内では最高の参加者数だった。レジュメが足りなくて慌てて追加してもらったりして、よかったよかった。それに比べて午後に出た特別テーマの内一つは、箸にも棒にもかからない無様なものだった。

夜は自主シンポジウムのコメントを依頼されていた。しかし自分がつもりして用意したものが全体と大幅にズレていて、気持ちが悪げってしまった。

児童相談所をはじめ、臨床現場で働く人

たちが活発に学会発表するようになった先鞭はつけたと思っている。今では考えられないかも知れないが、スタート時期の心理臨床学会では、本当に現場からの発表が少なかった。

シンポのコメント内容はおぼろげだが、状況は記憶している。期待されているものを外さず、それ風なことを言うのが苦手だ。私の関心の持ち方が、皆さんの関心事ではないことがあるのは承知だ。しかしそれは、如何ともしがたいことなので、合わせるのは断念している。

人にはそれぞれ、思惑や魂胆があって、それをいけないとは思わない。ただ、他人の思惑に一枚噛まされるのは嫌だ。私は誰かの道具ではない。そういう気持ちがかんたん強くなっている気がする。これも老化現象の一つなのだろうが、それで良いと思ってしまう。

他の人の気持ちも尊重はしようと思うが、ご機嫌取りばかりもしてられないなんて、意地悪かもしれないことも思っている。

9/24 午後に参加した特別テーマ「家族への援助における工夫・個人療法と家族療法のメタストラクチャー」の発表はそれぞれに面白かった。

しかしこのごろの僕は以前のようにその会場で、質問や発言が出来なくなっている。要約して、ポイントを絞って話すのは捨てざるものが多すぎるようで辛いのだ。発表者も同じ思いで答えているのだろうと考えると話せなくなる。

夜の懇親会は例によって、物凄い数の出席者で誰が居るのやら居ないのやら。その後14人ばかりで六本木へくりだし二時半過ぎまで、下戸の僕は一生行かな

いだろう所へも付き合った。

ディベート文化をもてはやすようになって久しい。しかし私は、あれが面白くない。質疑応答が嫌になったのは、「良いご質問ですね。有り難うございます」とどこかで返されて以来だ。



「なんだ、この空々しいテーブルマナーのようなやりとりは！」と思ってしまった。

形式が主導する文化の中で、内容は確実に浅くなった。そして物知り、データ重視の百科事典人間が論証根拠を持って話すのが、賢い技になった。

結果の出ているものを集めて、整理して何か言うのは編集者だ。その勉強もしたから分かるが、彼等はクリエイターではない。

もう一からの発明なんてない！なんて言いくさに簡単に同意してしまわないのが大切だ。そんなことは分かっている。だからこそ、産みの苦しみがある。チョッチョと組み替えて、何かを言うような人ばかりになることには用心がいる。

9/26 久しぶりに職場に出た。二十日以上、一時保護所にいた少女の行き先を会議で決めた。言葉に表しがたい質の貧しさや、育ててもらえなかった人間的なも



のから、自分自身を守るのは鈍感さしかないのかもしれないと思ったりさせられた子だった。

午後、府立城南高校(アジア大会女子重量挙げで銀メダルの子の学校だっ)校内職員研修会で話をした。

とんぼがえりして彼女の最後の夜の宿直をした。一人で、こんなに長く居たのにほとんど男の職員には話さない子だった。面白いことを言ってやると、太めの工藤静香のような笑顔で弱々しく笑った。

太めの工藤静香は太めのキムタクと出会えただろうか？ 繰り返し、様々な事情を抱えた子達と出会って別れた。

あの時の年齢に22年を加算すると、今の彼等の年齢である。どこでどうしているだろう。おそらく、皆何とかやっているというのが正解だ。人は皆、何とかなるものだ。騒ぎすぎるのは、関係者の臆病な自己保身ゆえだ。

私は来談者に向かって出来ることをする。出来ないことは出来ない。それで仕方ないと思っている。自分の不安を、他者を動員して膨張させるような事はしない。

9/27-28 昨日泊まって、今日はまた一泊の福祉司会議だ。この一週間、家で寝たのが一日。全くなんてこった。この会議もそろそろ転換しかけている。

終了後、児相に戻ってセミナーの案内状の発送業務を福知山・宇治・京都各児相の人達とした。よく動いてくれるみんなの中で、嬉しく見ている幸せ。

この頃も今も、していることにあまり変わりがないことに驚く。人はなかなか変化しないようだ。

まあ、良いと思ったことを繰り返してい

るのだから、それで納得ではあるが。歳を取ったら、生き方が変わるというのは誤解の期待のようだ。今だめなものはずっとだめだということらしい。

9/29-30 泊まり明けの週末。昼頃まで寝ていた。何だかバタバタして準備ができていなかった来週のぼむ展のチェックが篠原社長からあった。「まんが新聞」が12月で廃刊になるとショッキングなニュースもいっしょに。これではいかんと思いき直して、土曜の午後から日曜にかけて、3点仕上げで宅急便で送る段取りをした。

やりたいことは皆、させて貰って生きていた。それは今も変わらないのかと思う。そうすることで届いたものも少なくない。

家族心理臨床の渦中において、マンガ家としての活動をし、講演や、講座を引き受け、時に出向いて受講する。

今と何も変わらない二十二年前である。



(写真は2011年春、イギリス視察に行った時のもので、本文とは関係ありません)